

音楽科における体験的実習の試み

——療育的音楽教育に基づいて——

A Trial of Practical Training Based on Therapeutic Music Education

手塚 実

Minoru Tezuka

はじめに

奥田幹生文部大臣は平成8年7月29日、教育職員養成審議会に対し、大学の教員養成課程から採用、教員研修にいたるまでの教員づくりの全面的な見直しを諮問し、来夏には中間答申をするよう求めた。これは、いじめや不登校の問題の深刻化に伴い豊かな人間性の回復を教育の現場に改めて求めようとするものである。

新学習指導要領における小学校音楽科の教科目標は「——音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養う」とあり⁽¹⁾、教育課程の基準を改善するねらいとして昭和62年12月に提出された教育課程審議会の答申のひとつには、「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること」とある⁽²⁾。しかしながら昨今の学校現場では豊かさどころかいじめによる自殺者が後を絶たず、不登校児の数も増加の一途をたどっている。もちろん、このような憂うべき事柄は様々な要因が複雑に絡まって生じたもので、ひとつの教科或いはひとりの教師がいくら頑張ってみても解決できるものではない。しかし、先に述べられた教科目標や答申内容が音楽科教育に直結しているということも否定できない。音楽教育の目的が「心の豊かさを育む」ことであるならば音楽科教育の立場から今一度ここで「豊かさ」とか「たくましさ」、ひいては音楽教育そのもののあり方を問い直すことは決して無意味ではないと考える。

論者は音楽教育の立場から新しい音楽教員の在り方を探るため平成3年9月、音楽研究室内に音楽療法研究会（以下自主ゼミと呼ぶ）を組織し、自由に参加した学生と共に研究を続けてきた。平成8年4月からは市内の精神薄弱者更生施設での臨床研究も開始した。

本小論ではその施設の利用者であるNさんと自主ゼミの学生との触れ合いを通して下記の点について検討する。

- 1) 療育的音楽教育の有用性
- 2) 音楽のもつエネルギーの検証
- 3) 施設での臨床体験が学生をいかに成長させたか

尚、プライバシー保護の必要があると思われる箇所については○等の記号を用いた。

I. 実習施設の概要

施設名；持田寮／経営主体；社会福祉法人・千鳥福祉会／定員；60名（入所30名、通所30名）

敷地面積；7,042㎡／建物面積；2,249㎡／職員；定数21名（現員30名）／建物；北棟、南棟、共用棟、リハビリ棟、作業棟、自活訓練棟、体育館

持田寮では通所、入所に関わりなく、施設利用者のことを「利用者」、施設職員を「援助員」と呼んでいる。従って利用者は施設職員を「〇〇さん」と呼ぶ。勿論、接し方は指導する側とされる側になるケースがほとんどだが指導者とか先生といった表現はない。利用者は可能な限り生活班と作業班いづれかに所属し、それぞれの目標に向かって学習する。

生活班／グループホームや地域社会で生活できるよう週1回のソーシャルスキル・トレーニングを行い、自活訓練棟では一人暮らしの訓練、買い物、調理、公共機関の使い方等を学ぶ。

作業班／福祉的就労・一般就労を目指してクリーニング、印刷、清掃、ベッド・メイキング、園芸等を学ぶ。

余暇援助として木曜日の午前中はスイミングか音楽活動。午後は買い物。体力や趣味に応じてクラブ活動を実施。情緒の安定や体力づくりと共に、余暇を自分で過ごせるよう土曜、日曜には特別なプログラムで援助している。

II. 実習方法

i) 参加学生について

自主ゼミ在籍学生数は6名。全員臨床の場への参加を希望したが授業との時間調整がつかず2名は断念した。しかし、施設側に彼等の熱意が伝わり、その2名は“宿直”という形で本活動に参加することになった。

音楽活動は木曜日の午前10時～12時くらいまでとし、宿直は参加学生の都合を優先するというで始まった。本活動での役割は次のとおりである。

小学課程音楽専攻3回生T（音楽活動のリーダー）、同S（音楽活動では利用者Nさんの担当及び宿直）、小学課程教育心理専攻3回生I（音楽活動全般）、特音課程声楽専攻2回生S（音楽活動でピアノ演奏を担当）、同鍵盤楽器専攻B（宿直）、小学課程音楽専攻2回生F（宿直）。

ii) 持田寮での事前調査

平成8年2月15日から4月11日までに計11回の事前調査を行う。調査は持田寮職員（音楽担当）と接見し今までの活動内容を伺ことから始め、寮内見学、持田寮職員による音楽活動見学を行った。更に、査定評価についての検討を行った。

査定評価

音楽を療法的にしかも正しく活用するためには対象者のことを十分に理解していなければならない。音楽療法に関して遅れをとっていた日本でも最近では〔査定評価（Assessment）→音楽活動（実際の行動）→記録・評価（Documentation）→評価・効果検証（Evaluation）〕の順で行って始めて音楽療法であるという概念が定着してきた。本実践もこれに習い査定評価に1ヵ月以上、見学回数にして11回の時間をさいた。見学後は毎週定期的にカンファレンスを持ち（月曜18:00～20:00）4月11日には音楽活動参加者全般に対する短期目標と長期目標を設定し、活動方法の検討を行った。

短期目標；音楽活動を通して情緒の安定を図り、言葉は無くても他の人とのコミュニケーションがとれるように導く。音楽活動場面と宿直場面でのギャップがあれば情報交換をしながら良い方向へと導く。

長期目標；音楽活動を通して共同生活をしていく上での社会性が身につくよう導く。障害による不便さを少しでも取り除く。

活動方法；物理的構造などの諸条件から週1回の音楽活動（事前、事後を入れて2時間）を行う。対象は集団。効果判定は活動に参加した人全員を対象にするがその判定が漠然としたものになることを避けるため、実験的にひとりの利用者にひとりのゼミ生が“担当”として深く関わってみることにした。その結果、利用者からNさんを選出しNさんの担当をSさんに決定した。

Nさんを選んだ理由は1)言葉がない。(発語は「コーヒー」だけ)2)木曜の音楽活動に参加できる(注1)3)極度な緊張状態にあるが身体的にはさほど問題はなさそう4)不安な表情が音楽活動時になると時折楽しそうな表情を見せることから音楽が好きそうの4点である。

注1；余暇援助として木曜の午前中には2つのプログラムがある。比較的軽度な利用者はスイミングに参加する。本実践が開始されるまではスイミングに参加できない利用者のためにカラオケの時間が設定されていた。

iii) 音楽活動の基本的な形態

時間帯	音楽活動内容	観察点と援助の仕方
10:00 ～ 音楽活動 開始前	ゼミ生が体育館に行き、音楽活動の準備を開始する。援助員（1名）が利用者を引率して体育館に来る。各自気儘に過ごす。	音楽活動参加者の体調、気分を把握する。効果判定の対象者になったNさんに対して担当者が詳細な観察をする。
10:30 ～ 音楽活動 開始	ピアノ担当者は「始まりの音楽」（注2）として位置づけた「散歩」を演奏する。演奏しながら全体を見る。	「始まりの音楽」が理解されているか。音楽が流れたらどういう行動にでるか。
10:40 ～ 「動」の 音楽 (注3)	活動がスムーズに流れ出したら「クシコスポスト」を演奏。テンポに変化をつける。ここまでは同じ曲を使用する。	音楽の速度変化に対しどのような反応があるか。身体機能についても観察する。
10:50 ～ 「聴く音	大江光「雪」「夢」「バロックワルツ」「楽しいワルツ」、ペールギュント「朝」を	心身のリラックスを図る。緊張気味で横になれない人に対しリラッ

楽」 (注4)	テープで流す。ストレッチを含む。	クスできるよう援助する。
11:00 ~ コミュニケーション	「肩たたき」「せいくらべ」「ロンドン橋渡ろう」「汽車」「ふるさと」「おぼろ月夜」「海」等を使用。輪になったり、橋を作ったり肩を叩きあったり。	ゼミ生と利用者の身体接触、利用者同志のそれは可能か。音楽を利用した働きかけ。童謡は概ねと歓迎を受ける。
11:10 ~ 「する音楽」 (注5)	簡易打楽器を用いてリズム遊び。身体的リハビリを兼ねる。ゼミ生の生演奏も取り入れる。教育的になり過ぎないように注意する。	歌えない人も音楽を楽しむことができるか。身体に不自由はないか。どんな楽器に興味を示すか。
11:20 ~ ゲーム的要素	ボール回し。コミュニケーションを図る目的もある。音楽ではリクエストコーナーを設ける。何かに対し譲歩することができるようなプログラムを考える。	ルールの理解。ゼミ生、利用者間のコミュニケーションはどうか。リクエストの嗜好、回数、仕方の変化を観察する。
11:30 音楽活動終了	「終わりの音楽」(注6)として「幸せなら手を叩こう」を歌と動作を交え音楽活動を締めくくる。次回を楽しみにするような終わり方を心掛ける。	終わりの音楽の理解。区切り、はじめについて学んでもらう。ガラガラとしない。
11:35 ~	音楽活動終了。フォローの時間。取り残された人に対してフォローする。音楽活動時間に匹敵するくらい重要な時間と考える。利用者自由行動。フォローされることを期待している人は居残るようになる。トラブルの仲裁。	誰が取り残されたか。その人はいつもどうか。取り残されたひとの感情を把握する。次回には必ず気配りをする。利用者の姿から受ける印象は正確なものが多い。

上記のスケジュール表はあくまで基本的なものでその日の利用者の行動・反応によって臨機応変に対応したことは言うまでもない。

注2／注6；音楽療法では言葉掛けがなくても音楽の時間の開始と終了を理解できるように「始まりの音楽」と「終わりの音楽」のパターン化を重要視している。

注3；身体ストレッチを目的に行う。冬など身体機能が低下している時など音楽活動中或いは移動中に骨折などの怪我を招くこともあるので特に注意したい。

注4；1954年、アメリカのエドワード・ポドルスキーによって「音楽の処方箋」が発表され、

以来聴く薬としての音楽が研究されてきた⁽³⁾。しかし、最近では理論的根拠が乏しいという説も一方ではある。しかし、本実践では「聴く音楽」を「静の音楽」として、警戒心や恐怖心の強い対象者が少しでもリラックスできることを目的として位置づけた。

注5；行動科学的治療理論では「音楽をする行為」は「聴く」行為より障害的行動に効果があるとされている⁽⁴⁾。

Ⅲ. Nさんについての査定評価

生年月日；S. 38年4月26日／入所年月日；H3年5月1日／家族；義父、母、妹、弟知能；IQ（SS）18／障害の有無；視力、聴力、上下肢は障害なし。てんかん無し。発語障害あり、中枢言語障害／趣味；音楽を聴くこと／嗜好；自動販売機のコーヒー

◎生活歴

母親が19歳の時、〇〇市で本人を出産（未婚）。本人は1歳の時から〇〇市の乳児院に預けられる。〇〇園に措置変更されていたが、3歳時に、施設に引き取るよう指導を受け母親が引き取った。3歳に達していたが歩行困難であった。その後、〇〇学園入所となる。同じ頃、母親は板前であった現在の父親と知り合い結婚する。本人の存在は知らせたものの障害をもっていることは伝えることができなかった。本人は〇〇学園では少しずつ身の周りのこともできるようになり、楽しそうに過ごしていたが、盆、正月の帰省時には（めったに帰ることはなかったが）義父に暴力を受けるようなこともあり母親は苦労したとのことである。18歳まで〇〇学園にいたが退所年齢に達したとの理由で考えもなく自宅に引き取り現在に至る。自宅での10年は何もしない毎日であった。母親は夫への遠慮からNさんに対して最小限の世話のみしていた。母親は本人のことを話題にすることを非常に恐れており、常に夫の顔色を見ながら対応している。その結果か、本人も大変おどおどした様子が伺える。

Ⅳ. Nさんとの音楽活動を通して

次に音楽活動に沿ったNさんの行動を見てみたい。記録の仕方は音楽活動をビデオ撮影し、それを見ながら定期的で開催されたカンファレンスで内容の検討と確認をした。活動記録には他の利用者のこと、音楽の扱い方、自分自身の戸惑いなど、またある時には大変感情の昂った表現も書き綴ってあるがここではできるだけ客観的な行動と全員一致した感想のみを記載するに留めた。また、考察と私見等は各セッション毎に①②——として付した。

ひとつの行動の前後には複雑な幾つかの行動（きっかけ＝働きかけ）がある。従って時間経過や発せられた言葉、それによる反応や行動について詳細について記述する必要がある。しかし、紙面に限りがあるので「音楽活動の流れ」については☆印の後に「Nさん担当者の働きかけとNさんの反応・行動」については★印の後に記した。また2回目からはNさんの大きな変化・成長に関わる事のみ記し、Nさんの行動分析は別の機会に譲ることとする。

〔第一回音楽活動 H.8.4.18〕

{音楽活動開始前}

☆ピアノ担当者が使用曲目の練習を開始。利用者数人がピアノの周りに集まり出し童謡曲集を持ってきて「これ弾いて、これ弾いて」とねだる①。★体育館の隅に一人でしゃがみこんでいる。顔の前で手を合わせている。顔を覆っているようにも見える。ゼミ生が声をかけながら横を通るがゼミ生を恐れるように身体を背ける。顔を覆っている手の隙間から見える表情は険しく眉間に皺をよせている。☆担当者が童謡を弾き出すと利用者もピアノに合わせて歌い始める②。★険しい表情が緩み始め笑顔（この日最初の笑顔）も時々見られる。これを見て担当が近づいてみると表情は一変し、また険しい表情になる。担当が隣に座り「おはよう」と声をかけるが眉間に皺をよせ、体を担当から背け全身で警戒心を表す。担当が軽くポンポンと肩に触れてみると逃げるように一定の距離をあける。担当が必要以上に接触を試みないと、一定の距離を担当との間に保てたと思って安心したのか流れている童謡に耳を傾け時々笑顔も見せる。音楽は査定評価通り好きらしい。笑顔は誰に対してというのではなく一人で得心したかのような笑顔である。

《考察》

①②；日本の音楽教育が果たした功績として、大人から子どもまで、健常者も障害者も共通の音楽を持っているということを一挙に挙げたい。

③；査定評価観察した結果である“Nさんは音楽が好きらしい”といことが当たっていたように思われる。

{音楽活動開始}

☆始まりの音楽「散歩」をピアノ担当が弾き始める。利用者がそれぞれに体育館を歩き始める①。★硬い表情のまま。体育館内を壁に添って（誰とも接触することのない距離を保って）大股で歩き始める②。音楽のテンポに動きは合っていない。歩いている利用者やゼミ生が近づくつもりもなくNさんに近づいただけで小走りで逃げ出す。それでいて音楽が鳴っていると時々ふっと笑顔になる③。☆テンポに変化をつける。★テンポによる行動の変化は認められない。担当が再び近づいて見るがやはり逃げ出す。担当が歩きながら近づいてみると走って逃げる。☆リーダーによる「輪になりましょう」の声かけに多くの利用者は輪になる。★全体の輪から少し離れた場所に座り込み、手で顔を覆う。担当がNさんと一定の距離を保ち近くに座ると警戒したように合わせた手の間から担当を見、後ずさりをする。☆ピアノ担当が「肩たたき」を弾く。利用者はすぐ歌い出す④。★担当、Nさんにさっと近づきNさんの肩をそっと叩くと弾かれたように体を背ける⑤。☆リーダーが肩たたきのしぐさするとほとんどの利用者はそれを真似てやりはじめる。肩たたきの歌詞である「タントンタントン」の箇所は動作と歌が一緒になる⑥。ピアノ伴奏で「肩たたき」を数回繰り返す。★Nさん、体育館の隅の方へ行ってしまうしゃがみこみ、顔を手で覆う。

<聴く音楽>

☆テープで「人体」⑦をかける。利用者はそれぞれ横になる。横になったらシーンと静かになる⑧。★体育館の隅でひとりでしゃがみこむ。

<する音楽>

☆リーダーがタンバリンや鈴など簡易打楽器の入っている箱を持ってくる。利用者は思い思い

の楽器を手にする。★だれよりも早くタンバリンを手にする。それでいてタンバリンを鳴らすわけもなく傍に置いておくだけ。しかし、この行動の後表情が緩む。笑顔と固い表情を何度も繰り返す。担当が笑顔の時を見計らってNさんの横に座りタンバリンを叩くが体を背ける。☆「おぼろ月夜」をピアノ担当者が弾く。参加者はそれに合わせ手にした楽器を鳴らす。曲を知っている人は歌い出す。★笑顔であっても担当が何らかの働きかけをするとさっと表情が陰しくなる。

☆谷村新司の「昴」流す。知っている人は歌い出す。歌わずとも音楽の流れに身を委ねるひとも見られるが合奏の時ほど盛り上がらない⑨。★急に笑顔に変わる。本日の活動中最も穏やかな笑顔、優しい笑顔が認められた⑩。

{終わりの音楽}

☆「幸せなら手を叩こう」を歌に動作つけ合唱して終わる。★Nさんは音楽活動が終わると誰よりも早く体育館の出口まで行ってしまふ。そしてしゃがみこむ。☆ゼミ生、Nさん担当者が「Nさんさよなら」と声をかけるが怯えきった表情で顔を覆った手の隙間から周囲をキョロキョロ見回すだけ。

《考察》

①②③④⑧⑩；ひとつの音楽によってある行動が導きだされるとしたら、これこそ音楽そのものがもつエネルギーの表れと解釈したい。

⑤；何とかNさんとコミュニケーションをとろうとしている担当の懸命さが伺われる。この後のセッションから次第にNさんが担当学生を受け入れていく様子に注意して頂きたい。

⑥；音楽活動の流れにすぐのれるのは査定評価期間中の11回に渡る事前調査とその間にゼミ生と利用者間に「馴染みの関係」が成立していたためと思われる。

⑦；「驚異の小宇宙・人体」サウンド・トラック～遙かなる時間（とき）の彼方へ～より。

⑨；経験の浅い教師は“静かな状態”を“盛り上がっていない”と判断しがち。

〔第2回音楽活動 H.8.4.25〕

{音楽活動開始前}

★前回と同じ。担当が隣に座り「おはよう」と声をかけるが体を背けるように離れる。

{音楽活動開始}

☆ピアノ「散歩」を弾き出す。★体育館の中をぐるぐると歩き出す。☆「散歩」の速度変化★速くなると走りだしゆっくりになると歩き出す（変化）（注7）。音楽のテンポと歩行速度無関係。☆「クシコスポスト」に曲が変わる。★急に早く走り始める。笑顔になる。担当が手を差し出すとはじめて逃げ出さず担当の手にかすかに触れて走り去った（変化）。☆「肩たたき」に曲が変わりこの歌を歌いながら皆で輪になって肩たたきをする。皆、ピアノに合わせて歌い始める。「肩たたき」を歌いながら一列になり前の人の肩を叩いてあげる。★輪の外にしゃがみこむ。担当、少し距離をおいて近くに座る。距離があると逃げ出さない。歌が聞こえてくると笑顔になる。「タントンタントン」で肩を叩いてみる。笑顔がさっと曇りいつもの陰しい表情に戻ってしまう。☆テープを聴きながら柔軟運動をする。★輪の外でずーっとしゃがみこんでいる。皆が横になると離れたところで横になる。☆合奏をするため楽器箱から各自タンバリンか

鈴をもって来る①。★別の箱からわざわざマラカスを持ってくる。マラカス以外には目もくれず今回もマラカスを自分の物とでも言いたげに自分の脇に置く。置いたら満足し触る様子もない。担当者が横に座り大きな声で歌いながらタンバリンを叩いてみる。歌が流れていると笑顔は消えずこの時は逃げ出さなかった(変化)。担当者がNさんが持ってきたマラカスを鳴らしてみる。これには手を伸ばし、回すような動作をする(変化)。Nさんの気分が音楽に乗っていると感ずる。マラカスを手にし1、2回振る。表情も柔らかい。

{終わりの音楽}

☆「幸せなら手を叩こう」を歌と動作を入れ終わる。★体育館の出入り口へさっと行き昼食を取りたがる。

《考察》

①；Nさんが前回マラカスに興味を示したので敢えて他の利用者にタンバリンか鈴を持ってくるように指示した。Nさんは他の利用者には目もくれずマラカスの所へ行った。

注7；今回見られた(変化)から全セッションを通して(変化)と記した所は論者とゼミ生がNさんの成長と認めた箇所である。

{第3回音楽活動 H.8.5.9}

{音楽活動開始前} いつもと同じ。

{音楽活動開始}

☆演奏が「クシコスポスト」に変わる。利用者が走り出す。利用者間で互いに「走ろうよ」という言葉かけが見られた。★急に早く走り始める。走る速さは他の誰よりも速い。担当者が走るNさんに近づいてみる。Nさんは凄い速さで走り去るが表情はニコニコ(変化)。初めてのことである。☆肩たたきを歌いながらリーダーが「輪になろう」と働きかける。皆、手は繋がらないものの輪の形になる。★体育館の隅にしゃがみこんでしまう。しゃがみこんだ場所で立ったり座ったりしている。☆ピアノ「肩たたき」を演奏。利用者これに合わせて歌いながら肩をたたく。★担当が後ろから近づきそっと肩に触れてみる。びっくりするように体を背け警戒したような恰好(手で顔を覆う例の恰好)になる。眉間には皺をよせて。担当が笑顔で何度か肩を叩いたりしてみるが警戒心は薄れなかった。担当がしつこく笑顔一杯で肩たたきをすると諦めたのかそれとも慣れたのか或いは警戒するの必要性を感じなくなったのか表情が和らいでくる。担当者ホットする①。☆利用者同志3人から5人の列を作り互いの肩を叩き合う。★担当が他の利用者と同じような参加をNさんにさせたくてNさんの肩を叩きながら、歌を歌いながら、叩いた手を止めNさんの肩をそっと押してみる。Nさんはこれに応じて体育館の中を歩き出す。輪の中には参加できなかったが担当の働きかけに応じてくれたのはこれが初めて(大きな変化)。☆＜聴く音楽＞で大江光の音楽を聴きながら座ったまま首を動かしたり腕をまわしたりする。★体育館の隅にしゃがみこむ②。☆横になって同じ音楽を聴く。★横にもならず手で顔を覆う。この動作をとると担当がどのような働きかけをしても体を背けてしまう。☆テープで「背比べ」が流される。テンポが速くてついてこれない人がでる③。3拍子のリズムをタンバリンと鈴に別れて叩いてみる。1拍目タンバリン2、3拍目鈴。拍どおりに叩ける人はいない。④。☆進行者が「終わりにしましょう。楽器を片づけましょう」と言う。★誰よりも速く楽器を走って

片付けに行く。そのあと元の位置に戻りしゃがみこむ。こちらのいうことは理解していることが判明する⑤。

{終わりの音楽}

☆歌とダンス「幸せなら手をたたこう」をテープで流す。テープはテンポが速くキイも高かったので半数くらい立ち往生。知的レベルの高い人、若いひとはそれでもついてこれたがそうじゃないひとは只みているだけ⑥。★担当がNさんの前で「幸せなら手をたたこう」を歌いパンパンと2回手を打つがすぐ横を向いてしまう。担当者が今度は背中をトントンとたたくと声にならない声「ヒーッ」と言いながら体を背ける。体育館の出入口付近の隅の方へ行きしゃがみこむ。時々Nさんの前を通る援助者に何か訴える⑦。ゼミ生や担当者が「Nさん、さようなら」と言うが例のスタイルでしゃがみこんだまま体を背ける。

《考察》

①；担当者の稚拙な接し方が目につくがなりふり構わずNさんに関わろうとしている姿は感動に値する。相手が何人いようと何年教師をやろうと対象者に対してはいつまでもこうでありたい。

②；新しいことへの対応ができない時どうしていいか分からなくてこの行動にできるものと現段階では想像している。

③⑥；キイの高さやテンポ設定の重要性については文献講読で充分理解されていたはずだが、この点を多少軽視したようである。3回目にして音楽担当に気の緩みを感じられる。

④；音楽活動でそれが治療的であれ或いは療育的・教育的であれこの“リズム指導”の場面を良く見かける。ほとんどの場合それは失敗に終わっている。音楽専攻した者が考えるほど“リズム遊び”は面白くない。それどころか1拍目を強くだとか中くらいに強く（強弱中強弱の4拍子）などの指導はつまらないらしい。音楽の教師は“リズム指導”について多に考えなければならぬと考える。

⑤；査定評価で記録された「知能；IQ（SS）18」は発語がないからこう判断されたものと思われる。少なくとも話し言葉の理解は充分できるものと判断した。

⑥；食堂に行ってもすぐ食事をとることから、恐らくお腹が空いたと訴えていると思われる。

[第4回音楽活動 H.8.5.16]

{音楽活動開始前}

★Nさんいつもと変わらない。髪の毛が気になるらしくずーっと触っている①。

{音楽活動開始}

☆「クシコスポスト」に変更。ピアノ担当者、練習の成果が見える②。演奏の出来が良い。★クシコスポストになると急に笑顔になり、両手を伸ばし、肘を曲げ走り出す。もう髪の毛は触っていない。クシコスポストはNさんの執着心をなくす力があるのかも知れない。☆リーダーが「輪をつくろう」と利用者に働きかける。大江光の曲をテープで流す。利用者とゼミ生が混ざって輪になる。★歩き終え、うろうろしているNさんに担当者が手を繋ごうと手を差し出す。Nさん、少しだけ手を出しかける。抵抗する様子にとれなかったので担当者はNさんの手を軽く握り皆の円の方へ連れていく。ここでも抵抗をみせない（変化）。☆つくった円を大きくした

り、小さくしたりして手を繋いだまま動く。★旨く輪の中に入れたのでNさんもう片方の手を利用者に「手をつないで」と言う利用者「ガシッ」と握る。Nさんは繋がれたまま。抵抗する様子はない(変化)。初めて皆の輪の中に入れた。初めて皆と手を繋げた。大きな円になるため後方に下がるとき、視線は下向きだが笑顔になる。小さな円になるため前方へ前進するときは多少の抵抗を示す。少し表情がこわばる。前進はあまりしない。他人との接触はこの段階ではまだ難しそう。☆円のまま座って伸びや腕回しをする。★輪の中で正座し、皆の様子をじっと見ている。しゃがみこみではなく、手で顔も覆わない(大変大きな変化)。今日もマラカスを素早く取りにいき、体育館の隅の自分の脇にずーっと置いている。一度も鳴らさない。担当が横に座り歌を歌うが体を背ける。担当が背中をテンポに合わせて軽くたたたくが退ける。担当は手を出すのをやめ横に座って歌を歌い続ける③。★皆の輪の近くに行き正座する。顔を覆わない。ゼミ生が働きかけると立ち上がりベルを手にする。かすかにベルを振る。振り方が小さく音がでない。担当が手を取りテンポに合わせて振る。ずーっと担当が手をとっていた④。少し強引かと思いながらも。しかし、抵抗は示さなかった。

《考察》

①；宿直からの観察日誌から、このように何かにこだわっている時は何も耳に入らないということが知らされた。

②；先に述べたようにピアノ担当者の専攻は声楽である。従ってピアニストのような演奏はできない。この点に関して本人もある種の劣等感を抱いていた。しかし、今回のセッションでみられた利用者の反応は明らかに“巧い”ピアノ演奏を楽しんでいる様子だった。心のこもった演奏は人に通ずる。対象者が誰であろうと“手抜き演奏”はしてはならない。下手な演奏と手抜きの演奏は違う。今回の“心にこもった演奏”の心とは正に“利用者を楽しんでもらえる演奏がしたい”と絶えず思い続けた心であったということができよう。

③；担当の学生に余裕が感じられる。

④；音楽療法、療育音楽で楽器を媒介にしたメリットの好例。

〔第5回音楽活動 H.8.5.24〕

{音楽活動開始}

☆「皆さん円になりましょう」の声に輪ができる。★担当とは手を繋げるが利用者とは繋げなかった①。Nさんは握力が弱い。担当も同じ程度の握力で握る。輪が小さくなる時は接触が多くなるのでこの動きは嫌いな様子。時々担当とも手が離れそうになる。しかし、手を差し出すと握り返すようになった(変化)②。☆横になる。★例のポーズになり両手の間から皆の様子を見ているが輪の中に位置している。☆「肩たたき」「汽車」「ロンドン橋」等。★担当が肩を叩く。全く抵抗を示さず笑顔を返す。担当が肩を押すと動き出す。一緒にぐるぐる歩く。担当がNさんの手を取り橋を作る。抵抗を示さず。皆が通れる高さまで腕を挙げ橋を作る(変化)③。他人が近づくと少し後ずさりをするが最後まで「汽車ごっこ」を一緒にやれた。☆「それではこっちへ集まりましょう」の声かけ。★言葉を理解している。指示に従う。担当が横に座り時々話しかけるように歌うとニコッとする(変化)④。☆「おぼろ月夜」「せいくらべ」慣れたせいか大声で歌い出す。教師が飽きてはいけない。★皆の集まりの中でしゃがみこんで

聴いている。担当がベルを渡すと皆の前で振り下ろした⑤。担当が「もうすぐご飯だね」と言う。「ご飯」の言葉に反応し担当の顔を覗く。何も出ないと分かるとそっぽを向いた。

《考察》

- ①；利用者の誰となら手が繋げれるのかを把握し、短期目標として“他の利用者とも交流がとれる”という項を入れたい。
- ②；担当の愛情を受入れ、心を開き始めていると理解したい。
- ③；Nさんの場合、警戒の形が両の脇をしっかり絞めることだった。従ってこれを開き手を高く挙げるとい事がいかにリラックスしてきたかを証明することができると思う。
- ④；顔の表情で担当とコミュニケーションがとれたのは初めて。
- ⑤；微かな動きなので小さな音しか出なかったがマラカスでさえ振ることができなかったことを思えば著しい変化と認められる。

〔第6回音楽活動 H.8.5.30〕

{音楽活動開始}

☆パールギュントの「朝」で輪になる。★担当以外のゼミ生と初めて手を繋ぐ。他の利用者とも手が繋げる。徐々に人の中にあることができるようになってきた①。☆「肩たたき」★歌うことはないが肩を叩かれることには抵抗を示さず。☆「汽車」「ロンドン橋」★他のゼミ生とも橋が作れる。皆を通してあげれる。列を作った時、他のゼミ生の肩を微かに持とうと手を伸ばしたがすぐ引っ込めてしまう②。

《考察》

- ①；今回初めて使用。音楽の効用と思われる。音楽が他人との接触をスムーズにしてくれたように思う。聴かず音楽には特に選曲に関して注意と研究が必要。
- ②；自分から手を差し出しのは初めて。大きな変化・成長と認めたい。

〔第7回音楽活動 H.8.6.6〕

{音楽活動開始前}

☆この日、東京への旅行グループが出発し、その見送りがあったため音楽活動の始まりが遅くなった。若い人達は出発し、お年寄りばかりの活動となった。★ゼミ生も見送りに出たがその中にNさんの姿は見られなかった。おそらく体育館におられたと思われる。

{音楽活動開始}

☆音楽活動は同じ。★非常に機嫌の良い時の動作（＝宙を蹴る）が時々見られる①。誰とでも手を繋ぐようになった（大きな変化・成長）②。☆座って音楽に合わせて揺れたり手を上に振ったりする。★周りの様子を見、かすかに同じように動く姿が見られる③。☆輪になったまま「肩たたき」をピアノに合わせてする。★すんなり参加。前の人の肩を持ったり叩いたりという行動はないがそれをされることに抵抗を示さなくなった。担当が後ろから肩を持って押しても楽しそうな笑顔を時々見せるようになる。☆「汽車」のピアノに合わせてみんなでトンネルをくぐる。★トンネルをくぐることができた。今日は体育館の隅で例の警戒のポーズは一度も見られない。新しい曲になったら例の警戒のポーズになってしまった。☆いつもと違う曲をい

きなり歌おうとしたので戸惑いが見られた。利用者の中に大きな声で歌うひとがおられこの方につられて他の利用者も歌い出した④。

《考察》

- ①；宿直の観察日誌からこの情報を得る。
- ②；但し働きかけが必要。
- ③；他の利用者の模倣を試みたの初めて。
- ④；所謂“巻き込み現象”である集団音楽活動によるメリット。

〔第8回音楽活動 H.8.6.13〕

{音楽活動開始前}

☆三朝温泉に行った人が抜け今日は若い人ばかり（15人）の活動となった。★いつもと同じスタイルだが担当が話しかけると体を背けるほどの抵抗を示さなかった①（初めてのこと）。

{音楽活動開始}

☆いつもと同じ曲にドラゴンボールの曲なども加える。弾き方にも工夫を凝らす。★何の働きかけがなくてもひとりで歩いたり走ったりする。担当が近づくとき少しびっくりした様子で逃げる。担当が追いかけても追いつかない。表情は笑顔。鬼ごっこをしている感じ。☆「それでは円になりましょう」使用曲目；パールギュント「朝」。輪を小さくしたり大きくしたり。音楽が利用者の気分を高揚させる。輪のまま波を作る。★働きかけられると誰とでも手を繋いだ②。笑顔も多く足で宙を蹴る動作も何度もする。☆円の中心にNさん担当が位置しボールのやり取りをする。音楽はトトロのテーマソングやオルゴール曲（静かな曲）を使用。★他の利用者と同じ位置に座る。うつむき加減ではあるがげんこつした手を足の上に置く。自分の番が来る頃になるとそわそわし、下向きになる。担当がボールを転がすと下向きの視界の中にボールが入ったらしくしっかりと受け止める。そして担当にボールを返す。力は弱いが正確に返ってる。☆ボールのやり取りを利用者間でやってもらう。コミュニケーションが成立する。★隣の利用者がNさんの目の前にボールを置く。どうしたらいいのか分からない様子で自分の所に置く。隣の利用者がそれをとって回す。その様子を見ていたNさんは次から隣にボールを回せるようになっていた。むしろ、せっかく渡したボールに他の利用者が気がつかないときは「早くとって」と訴えるような表情をする。旨く気づいてくれるともとの姿勢（正座）に戻る。担当がNさんの正面に立ち、背伸びをしたり、首を回したりする。すこしだけ同じ動作の真似を試みる。表情は笑顔。突然走りだし、別のゼミ生の所へ行き、手を差し出し振るような恰好をする③。

{終わりの音楽}

☆「幸せなら手を叩こう」を動作つきで歌う。★車椅子の利用者の所へ行き笑顔でその利用者の手を「パンパン」と2回たたく。

《考察》

- ①；{音楽活動開始前}の行動・反応は今回まで何の変化も見られなかった。今回、初めての反応である。
- ②；今までは小さくなるとどうしても接触が多くなるので抵抗を示していたが今回初めて抵抗無く前進する。誰とでも手を繋げることはこれからの課題と考えていたがこれが実現した。

③；自分から他者へ積極的に働きかけたのは初めて。この時そのゼミ生に臨機応変（注8）があれば、Nさんの行為をもっとしっかり受け止めることができたと思われる。

注8；経験の豊かな音楽療法士の中には“その場その場に於いて臨機応変に対応できる力”を音楽療法家として最も重要な資質として掲げる人もいる。言い方を代えると「しっかり理論を勉強し、臨床の場ではそれをすっかり忘れること」と言うことになろうか。

〔第9回音楽活動 H.8.6.27〕

〔音楽活動開始前〕

☆教育実習があり、1週間抜けた。しかし、利用者はゼミ生を「音楽をやりにくる人」と理解している。〔音楽活動開始〕

☆ボール遊びをする。輪の中央にゼミ生が位置し、利用者に対して1対1の関係でボールのやりとりをする。★自分の番がくるととても嬉しそうに笑う。ボールを押し返す力は弱い但し優しい。☆隣の人に回していく活動に変えてみる。★緊張気味に相手を見ずに、しかしさっとではあるがボールを渡す①。

《考察》

①；ルールを理解ができています。

〔第10回音楽活動 H.8.7. 4〕

☆音楽活動内容、Nさんの行動・反応はいつもと変わらず。担当の働きかけでの反応は★クレンジングしたり情感込めて歌うと和やかな表情。足をドンドン鳴らしたり手をパンパンと打つと笑顔になる。その後、急に走りだし他のゼミ生のところへ行く。下を向いたまま手を差し出し振って戻ってくる①。Nさん、気分が乗ってくるとそれを誰かに伝えたい欲求が芽生えてきたようだ。最後は同じ行動。

《考察》

①；気分が乗ってくるとそれを誰かに伝えたい欲求が芽生えてきたようである。この芽生えをしっかりと受け止めていきたい。

〔第11回音楽活動 H.8.6.27〕 Nさんの担当者病気のため欠席。

〔第12回音楽活動 H.8.6.27〕

☆音楽活動内容いつもと変わらず。★どのプログラムにも消極的。こちらの働きかけを楽しんでいる様子はあるようなので担当も他のゼミ生もそっとしておく。今日は人と関わるがいやな日らしい。働きかけが強いと背を向けそうになる①。

《考察》

①；Nさんが生理中だということが後で分かった。こういうことは前もって情報提供して頂きたい。このような施設での治療・活動は連携プレイ、チームプレイが必要不可欠。生理中というのに音楽活動によく参加してくれたと思う。きっと担当者や他のゼミ生へ歓迎の意を表してくれたに違いない。

〔第13回音楽活動 H.8.7.25〕

☆いつもの曲に加え新曲「トロイメライ」を演奏する。★知っていたのか分からないがこの曲には笑顔で反応し歩行も穏やか。☆ボール遊び★担当が「Nさん」と呼ぶとしっかりと見返す①。ボールも正確に受け止め投げ返す。投げる振りをしたり遊びの要素を取り入れてみたがこれにも楽しそうに反応する。☆他の利用者が担当の所に来て「背中をかいて」と言う。担当がかいてあげるとNさんも背中を向けて自分の背中を指さす。担当が歌いながら2人の背中をかいてあげるとNさんは気持ち良さそうに笑顔になった。担当が背中をかくのをやめ立ち上がると不満そうな表情を見せる。☆リクエストコーナーを設ける。「大きな古時計」「線路は続くよどこまでも」「ドレミの歌」等のリクエストあり。皆楽しそうに歌う。★今回も立ったまま皆の様子を見ている。

{終わりの音楽}

☆「幸せなら手を叩こう」★いつものように体育館の出口へ一目散に行く。担当が「Nさん、またね」と声をかけると背中を向け背中をかいてくれとせがんでくる②。担当が昼食まで背中をかいてあげる。満足そうなNさん。きっとこの日の昼食はおいしかったに違いない。前期音楽活動13回終了

《考察》

- ①；名前を呼ばれてしっかり見返したのは初めて。
- ②； {終わりの音楽} での初めての变化。

V. 効果判定

表は持田寮で音楽活動が開始されてからのNさんの日常生活面と音楽活動面に関する効果判定のダイアグラムである。作成に際しては日本臨床心理研究所発行の「音楽行動チェックリスト」(老人用)(監修：松井紀和)(注9)を、E) 知的機能1.「痴呆症状がみられる」を「記憶力・把握力共に問題がある」に、F)「歌唱」を「言葉」に、そして歌唱の1、2、3、4をそれぞれ1) 言葉掛けは理解できるがほとんど発語はみられない、2) 特定の言葉のみ発語できる、3) 言葉で自分の要求を伝えることができる、4) 言葉によるコミュニケーションができるに変更して採用した。評価判定に際してはできるだけ客観性をもたせるためゼミ生全員が判定に加わった。最初と3ヵ月後の差については査定評価期間に抱いた印象を最初とし、13回の活動後を3ヵ月後とした。

注9；日本臨床心理研究所では音楽行動チェックリスト(Music behavior Check List)の児童用と老人用を開発し、あらわしにくい音楽療法の効果の評価を可能にした。使用上のマニュアルもあり、目的、構造、数値による表現法、記入方法、ダイアグラムの構造と記入方法、ダイアグラムのタイプそして治療方法への示唆が明らかにされている。

Nさんに対する療育的音楽教育の効果判定

- A) 積極性、B) 持続性、C) 協調性、D) 情緒性、E) 知的機能、F) 言葉、G) 手の操作、H) 粗大運動

※集計(1)A()+B()+C()+D()+E()+F()+G()+H()=()

(2)MCL-S指数 ((1)/32×100=())

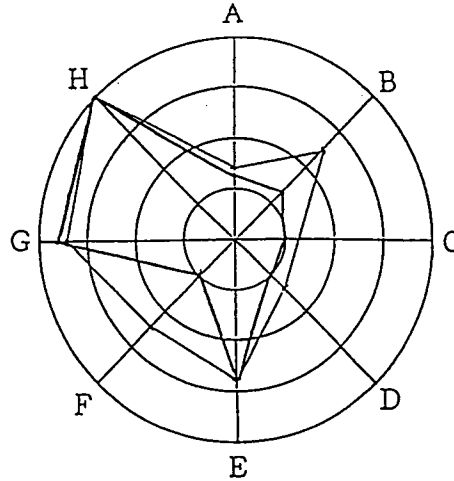
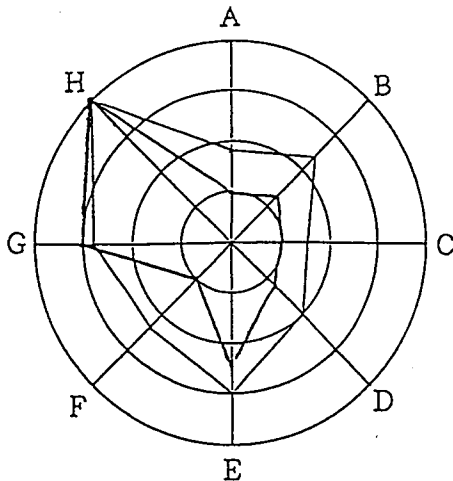
最初と3ヵ月後(太線が最初、細線が3ヵ月後)

(音楽活動面)

(MCL-S指数47,2)(MCL-S 指数61,6)

(生活面)

(MCL-S指数50,0)(MCL-S 指数57,3)



VI. 学生の成長

査定評価期間を含めて5か月余り。6名の学生は遅しく成長したと思う。こんな短期間で成長したのはおそらく彼らの人生の中で初めてのことと思う。彼らは毎回何らかのコメントを残してくれた。そのどれもが彼らの成長を物語るに十分なものといえる。その中からNさんの担当にあたったSさんの感想文をご紹介します。

平成8年7月31日。いつものようにNさんの部屋を覗く。(中略) 微笑みながら話しかける。「Nさん、お盆には家へ帰るの?」と聞く。(中略)「お盆にはお母さんに会えるのかな?」「お母さんに会いたい?」「離れていると寂しいよねー」と一方的に話しかけているとNさんの目がみるみるうちに涙でいっぱいになる。私は動揺してしまい「Nさんごめんね。悲しいこと思い出させてしまっごめんね」と何度も謝った。Nさんは涙をポロポロと零し、少ししゃくりあげて泣く。(中略) 何とか気持ちを切り換えようと活動のとき笑顔を見せる「ふるさと」を歌った。しかし、この日は逆にもっと泣き出してしまった。少しの間、何も言わずにその場でじっとしていた。この時のNさんに対して何もしてあげれない自分が情けなかった。そして、それ以上に私自身が何か悲しくて悲しくて言葉がなかった。何とも言えない悲しさに押し流されそうだった。Nさんの涙が少し落ちついた時、「Nさんの笑顔、私好きだなー」と言った。すると私の言葉を理解したのかニコッと笑ってくれた。Nさんの笑顔は以前から好きだったがこの日の笑顔は私を救ってくれた笑顔だった。

平成8年8月2日。

Nさんと同室のKさんの着替え介助と布団を敷くためNさんの部屋を訪れた。(中略)「Nさ

ん、この間、お母さんの話したね、お盆にはお母さんに会えるの？」と聞くと2本の指を突き出し「ヒーヒー」と聞き取りにくい声を発する。「何？」と聞く。Nさんはもう一度同じ行動を繰り返す。「お盆？」と聞くとうなずく。「そうか、お盆にはお母さんに会えるんだね」と言う。と前回の話をお母さんの話をしたときは全く違う安心した、安定した笑顔を見せる。穏やかである。「Nさんのお母さんでどんな人？」（お母さんの話がNさんが最も感情を表現してくれるので懲りずにしてきた）「今度会ってみたいなー」「Nさん、お母さんと3人で会ってお話したいなー」「一緒にコーヒーが飲みたいなー」と何のつながりのないことを話してみる。「お母さん」と「コーヒー」のところで視線がせわしなく動くが発語はない。（中略）このあとNさんは急に起き上がり、「背中をかいて」とばかりに自分の背中を指さしてきた。こんな時は「ン——」という低い声が出る。背中をかいてあげながら「ふるさと」「海」「おぼろ月夜」「ゆうやけこやけ」「赤とんぼ」を歌う。歌がでるとニコッと笑う。（中略）歌のリズムに合わせて背中をかきながら顔を近づけてみた。避けられると思っていた。しかし、今日のNさんはと一段と笑顔になった。（中略）今は二人きりの時にしかこのような関わり方はできない（注9）。誰かがいるとNさんも私もここまで自分を出せない。しかし、いつかはNさんも人前で自分の意志を表せるようになって欲しい。その時には私もNさんに負けないよう成長していきたい。

平成8年8月3日。

Nさんを起こし同室のKさんの着替え介助をする。Nさんは私に背を向けて布団の上に座っている。「どうしたの？ご飯食べに行かないの？」と声をかけると背中を指さし「ンー」と言う。ねだっている証拠である。「ご飯を食べなくちゃいけないから少しだけね」と言ってかいてあげる。気持ち良さそう。「はい、終わり」と言ってもその場から離れない。私は洗濯物を干さなければならぬので干し始めた。Nさんがずーっと座っていたので「Nさん、一枚づつとって手渡してくれる？」とお願いしてみた。Nさんは立ち上がり一枚づつ手渡してくれた。Nさんと一緒に仕事ができた。こんなに幸せな気分になれたのは初めてかもしれない。

注9；こうした関わり方の限界については河合眞が「音楽療法の利点と限界」（1992 東京：日本医学会雑誌 第107 巻・第12号 2226-2230）で述べている。

結び

療育音楽という言葉は赤星建彦⁶⁾が世に送り出した言葉で「ミュージック・トレーニング」とも言われている。高齢者や心身障害者に対し精神的にはストレスの解消を肉体的にはリハビリテーションを目的に行われる音楽活動である。療育音楽の根源をなすものは“音を楽しむこと”である。この事を大切にしながら対象者のハンディキャップに合わせて活動が行われる。赤星は楽器の開発やリズム・トレーニング法も開発もてがけ療育音楽としての指導カリキュラムも確立させ治療的にも教育的にも効果をあげている。

平成4年、論者が音楽療法を実践していたデイケアセンターに氏を招聘し高齢者に対しての療育音楽をしてもらったことがある。氏自身が高齢（大正10年生まれ）なので対象者に対し「あんた幾つになったかね？」「〇〇才」「なんだわしより若いう。だったらもっとしゃんとしなくちゃ！」といった会話で活動は始まった。初対面なので面食らった対象者も多かったし、

痴呆の症状が軽度な男性は不愉快な表情もみせた。しかし、これは所謂“馴染みの関係”が成立していないからでそれが成り立てば充分効果が期待されるアクティブな活動内容であった。

本研究を始めるに当たっての目的である「療育音楽の有用性」についてはNさんの行動・反応の変化を見れば疑う余地はない。音楽療法の有用性を語るとき対象者に何らかの効果が認められた場合、それは音楽が有効に働いたのかそれとも音楽療法家の人となり功を奏したのか話題になることが多い。このことについて論者は音楽も音楽を扱う人となりも重要なポイントと捉えている。Nさんの生活面での変化・成長は担当がSさんだったから成功したとも考えられるし、クシコスポストを無条件で受け入れるNさんを見れば「音楽そのものが持つエネルギー」の偉大さも理解されよう。また、「学生の成長」に関しては最後に紹介した日誌からSさんの成長は疑う余地もない。

音楽療法や療育音楽を必要とする人達は我々の働きかけに対して正直に反応する（軽傷、軽度の場合その限りではないが）。第3回目のセッションで、利用者はこちらの期待どおりの反応・行動を見せなかった。行動分析⁽⁶⁾の観点から見ると、これは先行刺激が準備されていなかったからということになる。

ともかく療育的音楽実習のワンクールが終わった。Nさんの行動分析、学生の音楽的レベルアップ、論者も含めて医学的、心理学的知識の乏しさ等今後の課題は山積している。しかし、13回のセッションを通してNさんや学生が大きく成長したことは疑いのない事実である。音楽療法を特殊教育と考える音楽教育家も未だに多いようだが、癒されたい子どもが増加すればするほど音楽療法的音楽教育、即ち療育音楽を学び実践することはこれからの音楽教育に益々必要になってくるものと思われる。

櫻林仁は「芸大では音楽療法は流行らなかった⁽⁷⁾」と回顧している。事実、論者が櫻林仁の講義を受講していた頃、音楽療法に興味はなかった。誰よりも上手な演奏ができることにはしか関心がなかった。しかし、教員養成課程で教鞭をとりはじめて20年余り、気がつかないうちに櫻林の言う「エロスとアガペーのバランス⁽⁸⁾」をとるようになっていたようである。

参考文献

- (1) 小原光一／高橋清
1989 小学校学習指導要領『音楽科の解説と実践』 東京：小学館 6-10
- (2) 塩野勇記
1989 中学校学習指導要領『音楽科の解説と実践』 東京：小学館 13
- (3) 村井靖児
1992 『こころに効く音楽』 東京：保健同人社 30-33
- (4) 城市則子
1993 「障害児教育における音楽効果」 島根：内地留学研修報告 10
- (5) 赤星建彦
1989 『ドレミでリハビリ』 東京：ぶどう社 28-35
- (6) R・ダグラス・グリーア（石井信生、野波健彦、吉富功修、木村次宏、弘中知世子、藤本 和恵訳）
『音楽学習の設計』 1990 東京：音楽之友社 1-6

(7) 櫻林仁

1996 『櫻林仁著作集』「音楽療法言論」 岐阜：岐阜県音楽療法研究所 474

(8) 櫻林仁

1996 『櫻林仁著作集』「音楽療法言論」 岐阜：岐阜県音楽療法研究所 475